

首里城下町の石敢當

高橋 誠 一

1 首里城下町の公園で涙ぐむ女子学生

2004年10月の初旬。照りつける太陽の木陰。小さな児童公園で、一人涙ぐみながらパンを食べている若い女性がいた。道行く人は、いったい彼女の身になにが起こったのだろうと心配したにちがいない。

彼女、関西大学文学部地理学研究室の3年次生である。首里にある「石敢當」の分布調査をしていたが、あまりにもその数は多く、しかも琉球特有の曲がりくねった複雑な道路網であるから、自分が立っている場所の確認さえ容易ではない。しかし、分担地区の調査は夕刻までにしあげなければならない。はたして完成するであろうかという不安がこみ上げてきて、パンを食べているうちに、涙がにじんできたという。ようやくすべてを完了、ホテルで筆者にその結果を報告する彼女は、笑顔で「先生、涙味のパンでした。でも私、やりとげましたよ。コンパ、楽しくやりましょうね」と言ってくれた。「ようやくだな。僕も心の中で泣いてるで」とこたえた。

2 地理学実習の合宿調査

関西大学文学部総合人文学科史学・地理学専修の地理学コースでは「地理学実習」の一環として、毎年秋に、合宿調査を実施しているが、2004年度は、沖縄県那覇市を中心とする地域で、10月4日～8日の4泊5日の日程で実施し

た。

沖縄を実習対象地域として選んだ経緯について簡単に説明しておきたい。従来は、主として指導教員がその対象地域を選択してきた。ほぼ近畿地方に限定してきたのは、主に学生の経費負担を考慮してのことであるが、全国から集まってくる学生に、大学近隣の地域に関する理解をうながしたいという意味もあった。ただ実習開講時に当該年度の調査地域を告げるという例年の方式では、履修学生にやや不満が生じることもあった。

そこで本年度は、「地理学実習」の前段階でもある2年次生時の「地理学基礎演習」で、まえもって学生の希望を問うということを試みた。その結果、希望地域は日本全国にわたったが、全員が例外なくあげたのが沖縄であった。

例年の実習調査では、本調査にさきだって6月に現地を訪問、予備的な調査を実施した後に本調査時の調査項目を設定している。しかし、本年度は遠隔地でもあるために、調査テーマの設定と事前学習に関しては、文献調査を主軸にせざるを得なかった。ただ、沖縄県への観光客は年間500万人を超え、修学旅行などで訪れたという学生は約半数にのぼる。また、旅行ガイドブックやマスコミなどで沖縄に関する情報も身近にある。それゆえ調査テーマの設定はある程度の具体的なイメージに基づいて行うことができた。

その結果、編成した班構成は、以下の通りである。①自然班……那覇市とその周辺地域における地形調査。沖縄島南部を中心とする地すべりや断層の分布と琉球石灰岩および島尻層との関係。②歴史・民俗班……那覇市首里城下町地区における歴史的景観と風水思想。琉球における地理思想を表現する石敢當の分布と道路網との関係。③都市・交通班……那覇市とその周辺地域における都市交通の変容と都市機能。レンタカーやモノレールの実情、郊外型大型商業施設の展開と新しい都市核の形成。④食文化班……沖縄の食文化とその実態。牧志公設市場と



農産市場における食料品販売の実態、那覇市の学校給食の献立と食材。⑤観光班……沖縄観光の実情とその問題点。那覇市の国際通りの変容、観光土産品店の分布と分類、観光施設の展開と課題。

先に述べた学生は、このうちの歴史・民俗班に所属、関西大学大学院博士課程前期課程の2名と5名の学部学生、さらに関西大学大学院出身で琉球大学教育学部助教授の西岡尚也氏の関係で参加してくれた2名の琉球大学生、計9名のメンバーの一員であった。

3 那覇市首里地区における石敢當の調査

沖縄の「石敢當」は、シーサーとともに「魔除け」の機能を持つものとして、琉球の特色的なものとして知られる。しかし、石敢當は沖縄や奄美諸島、すなわちかつての琉球地域にのみ分布しているわけではなく、北は北海道にもおよぶ日本の各地に存在することはあまり知られていない。もっとも日本の各地に存在するとは言っても、分布の中心は沖縄であるから、中国から琉球に伝えられ、さらに日本の各地に広がっていったことは、ほぼ間違いない。

石敢當については、小玉正任氏の詳細な研究があるがⁱ、T字型道路や十字路は百鬼の横行する場所と考えられ、道の突き当たりに立てることによって、邪気（邪鬼）を払うことができるとされてきた。その由来については、中国古代の力士の名前でその名にあやかって悪を払うという説と、「石敢えて當る」の意味で石の持つ堅固な性質からの連想が基になっているという説などがある。この2説のうちで岩石のマナに対する信仰を重視する後者の説のほうが蓋然性に富むと筆者は考えているが、中国の「泰山石敢當」などと比較した上で、なお慎重に検証することが必要であることは言うまでもない。

先の小玉氏の調査によれば、沖縄県を除く日本には、1345基の石敢當があるという。このうち最も多いのは鹿児島県の1153基、うち奄美諸島には377基があるとされる。ところが小玉氏の詳細な調査でも、沖縄県に関しては「きわめて多数」としか記されないほどの石敢當が存在するわけである。

琉球の首都であった首里地区（現那覇市）には、いったいどれほどの石敢當が存在するので

あろうか。また、具体的にはどのような地点に設置されているのであろうか。このような興味から、歴史・民俗班は首里城下町地区における石敢當の完全な分布図を作製しようということになったのである。

実は、首里地区の石敢當に関しては、すでに上江洲 均・宮城篤正両氏による調査報告があるⁱⁱ。両氏による調査は、首里城周辺地区の石敢當を対象にしたもので、その材質についても明らかにしたすぐれたものである。しかし調査地区が首里城下町の一部に限られていて130が挙げられるに過ぎない。しかも分布図が収録されていない。

そこで今回の調査では、城下町全域に及ぶ悉皆的な分布図の作製をめざし、筆者による城下町時代の道路ⁱⁱⁱと新しい道路との関係についても調べることにした。その結果は現在集約中であるが、約800もの石敢當が存在することがわかった。地理学教室では例年の調査を報告書として刊行しているが、その中で最終的な分布図と分析結果を公表する予定である。

- i 小玉正任『石敢當』、琉球新報社、1999年6月27日、p.1-345。
- ii 上江洲 均・宮城篤正「首里の石敢當」、『沖縄県立博物館紀要』第1号、1975年3月31日、p.1-18。
- iii 高橋誠一『琉球の都市と村落』、関西大学出版部、2003年9月19日、p.1-393。



写真はいずれも那覇市市街地の石敢當